
その日まで

JILL

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その日まで

【Nコード】

N2698Y

【作者名】

JILL

【あらすじ】

「わたしはあなたにとってどんな存在なの？ 同い年、同じ立場なら、私を見てくれるの？ お願い私だけを見て…。」何気ない毎日を通り過ぎていた私に、突然やってきた恋。それは秘密の甘く苦しい恋だった。

第1話

ねえ、あなたは誰を見ているの？
私じゃダメなの？私はあなたにとっては、
コドモなの？
教えて…もっと近づきたいよ。

「おっはよー！ー！！」

「おはよう。沙良。今日も元気ね。ってまた、髪濡れてるじゃない。」

「だって、乾かす時間なかったんだもん。学校行くの間に合わないかと思って焦ったわ。」

「はあ…。そんなことなら夜にお風呂入りなさいよ。」

「うん、わかってるんだけど、つい朝になっちゃうのよね。でもお風呂入ったばかりだから、いい匂いよ。男もこれで悩殺ね。どう…紫苑、嗅いでみる…？」

「ほうほう。いい匂いだわ。…って私を誘惑してどうする！男にでもしろっ！」

「あはは。いいねゝノリつつこみ！でも気になる人も、誘惑する彼氏もいないのよ。そうだったら、紫苑にするしかないじゃない？…あーもうチャイム鳴っちゃったゝ。それでは、今日も授業頑張りますかっ！」

いつもこうやって、紫苑と楽しく話することから私、沙良の朝は始まる。

私は人と話すのが好きだから、男の子も女の子も友達が多いけど、今は彼氏がない。

もちろん高校に入ってから、好きな人は出来た。

1人目に好きになったのは、高校で初めて出来た、かっこいいオ-

ラが出まくっている男友達。でもその人には、すぐに同じ学年の彼女が出来てしまった。ちなみに2年になった今でも付き合っていて、いつ見ても仲がいい。自分で言うのもなんだけど、その彼女より私のほうがずっと可愛いと思う。だから、二人が付き合ったと聞いたとき、すごくショックだった。けど、二人でいる雰囲気を見たら、すごく自然で、嫉妬は憧れに塗り替えられてしまった。

2人目に好きになったのは、同じクラスだった頭がよくて背の高いサッカー部の人。私が面白いことをすると、口を大きく開けて笑って、それが普段のクールな姿とギャップがあって惹かれてしまった。もう誰かにとられるのは嫌だったから、好きだと自覚してからは、たくさん話しかけて意識してもらうようにしたし、毎日可愛くして、気合いを入れて学校にも行った。でも、女の子にとっての戦いの日であるバレンタインデーに告白した私はあっさりと振られてしまった。振られた理由は、今は彼女がいらないからだ。それが本当かどうかはわからない。

恋は思っている以上に簡単にはいかない。
自分の好きな人が、自分を好きになってくれることは奇跡なんだと恋をしてから私は初めて知ったのだった。

そのまま時は過ぎ、今は高2の5月。好きな人がいないままでもいいような気もするが、やっぱり恋をする女の子は輝いているから、私も恋をしたいのだ。たとえ、片思いでもいいから。そんな思いを抱えて、変わり映えのない毎日を過ごしていた私は、片思いの痛みを全くわかっていなかった。

このときすぐ目の前にまで切ない恋が迫っていたというのに。

第2話

今日もこれからいつも通りのホームルームが始まる。担任から授業や行事に関する連絡を聞くのだが、これもまた退屈な時間である。

「おはよう、みんな。今日の連絡をする前に、うちのクラスの来た教育実習生を紹介したいと思う。」

いつもとは違った担任の言葉に反応して、おおー待ってました！とか可愛い先生がいいな。かつこいい先生がいいな。などと言って、一斉にみんなが騒ぎ始めた。

教育実習生が来ることをすっかり忘れていた私は、あれそうだった？と隣の席にいる紫苑に話しかけた。

「そうだよ。もう、沙良は興味ないことはすぐ忘れるんだから。でもどんな人かは気になるね。楽しい人がいいな私は。」

「どうせそんなに仲良くなることなんてないから、どうでもいいかな。去年の教育実習生とも仲良くなならないまま終わったし、どんな人だったかも覚えてないくらいだもん。」

「沙良ってば、冷めすぎ。ちゃんと覚えててあげてよ。まあそんな

んじゃ今年も、教育実習生とは仲良くならないのかもね？」

「おい、みんな静かにしろ。それじゃ紹介出来ないだろうが。」

やっと静かになったクラスに、先生の声が響く。

「それじゃ、入って来て、川口君。」

「はい。失礼します。」

その声とともに、スーツを着た長身の男の人がドアを開けて入ってきた。

その姿を一斉に見つめたみんなは一瞬静かになったが、すぐに教室が再び騒がしくなった。

特に、女子がである。なぜなら、入ってきた人が顔の整ったカッコいい人であつたからだ。さらさらの黒髪に、顔が小さく、目は切れ長で鼻は高いわけではないがすつとしていて唇が薄い。口角が上がっているのでクールながらも、嫌味のない顔立ちになっているのだと思う。

すぐに観察をした私は、とりあえずそれで満足して、みんなと騒ぐことはなかった。確にかっこいいが、私は年上には興味がないし、

どうせすぐいなくなるのだ。そんな人に騒ぐほど、私は可愛い子ではない。

だから、その後に続いた川口先生の紹介もきちんと聞いてなかったし、顔もそれ以上見ていなかった。川口先生の第一印象はかなり薄いものだった。どうせ関わることなんてないんだから、どうだっていいと思っていた。

そう思っていたのだ、このときまでは。

第3話

川口先生は数学担当だったので、今日から1ヶ月間は私のクラスに数学を教えている担任に代わって川口先生が教えることになった。

初めての授業で緊張しているのが丸わかりだったが、丁寧でなかなかわかりやすい授業だったと思う。問題を解く時間を設けて、先生は担任の外崎先生と教室を回って、わからないところを教えていた。とは言っても、私は近くの男友達にわからないところを教えていたのであまりきちんと見てはいなかったのだが。

私は定期試験で常に10位以内に入る成績で、特に数学は得意なので普段から教えることが多い。仲のいい男友達が普段から勉強をしないので、私をいつも頼ってくるのだ。人に教えることが嫌いではないし、教えることによってさらに理解が深まるので、私もいやいや教えているわけではない。

「あー！全然わかんねー。なあ沙良これどうやってやんだよ？」

「ん…？ちよつと待ってね。……よし、出来た！！どこがわかんないって？」

「これだよこれ。これ微分したら次になにすりゃいいわけ？」

「あゝ。それはねゝゝここをゝゝ」

私が教えようとした時、優しい声の上から聞こえた。

「どこかわからないところがあった？ゝゝうまく教えられなかったから、わからなかったよな。」

川口先生から声をかけられると思っていなかったで、私は少し驚いてしまった。

「あゝ。えつとゝ大丈夫です。上手だったと思います。ゝゝ教えるの。」

「そう？昨日たくさん練習したのに、本番では全然だめだなゝと思っただから、そう言ってくれると嬉しいよ。」

そう笑って先生は、「川口先生ゝこつち来て教えてくださいよお。」と甘えた声を出した女子のところへ教えに行ってしまった。

これが川口先生と交わした初めての会話だった。

そして、最後に笑った顔がふんわりと柔らかくて私は思わず見惚れていた。年上の人が可愛く笑った顔というのは、素敵で……これがギャップなのか？と考え込んでしまった。

「おい、沙良ってば。早く教えてくれよ！すぐに妄想すんだからな
ー沙良は。」

「あつごめんごめん！！んで、そこはね…。」

再び現実に戻って私は教えることに集中し、そのまま数学の時間は終わったのだった。

しかし、このいつもと同じような時間も今日は少し違っていた。先生の笑顔が印象的で、私の心にしっかりと焼き付いてしまったのだから。

第4話

「はい、ホームルーム終わり。明日もちゃんと学校来いよー。川口先生からは何か言いたいこととかある？」

「ええっと…。今日は、ぼろぼろな授業ですみませんでした。外崎先生のようにわかりやすい授業が出来るように、頑張っていきたいと思います。あと、年はそんなに離れていないはずなので、気軽に話しかけてくださいね。」

その言葉にみんなが反応した。

「彼女はいるんですかー？」「アドレス教えてー!!」「先生。年のこと気にしてんの？」などと、やかましく言いだしたのに、外崎先生が、呆れ気味に声を大きくして言った。

「そういうプライベートな質問はやめなさい。数学のこととか、大学のことを聞いたらいいだろう？まったく…。川口先生も、言いたくないことは言わなくていいからね。じゃ、みんな帰れよ。あ、今日の日直！ー今日から日誌を見るのは川口先生だから、川口先生に日誌渡せよ。」

さあ帰ろうと準備をしていた私は、そこで初めて日誌を書いてないことを思い出した。

「うわっ！日誌書いてないし！！どうしょ…。しかも川口先生に渡すのか…」

先生って、いつまでいるんだろう？私は日誌を丁寧に書くので、毎回30分はかかってしまう。というか、教育実習生の人たちって、朝とか休み時間どこにいるの？

「沙良、途中まで一緒に帰ろう。」

「あ、紫苑。ごめん、日誌まだ書いてなくて…」

「そっかー！わかった。じゃあ、また明日ね！！」

「うん、また明日。」

紫苑に断りを入れてから、私はとりあえず川口先生に話しかけることにした。

「あの、川口先生。私が今日の日直なんですけど…まだ日誌書いてなくて…。書いたらどこに持っていったらいいですか？それともす

ぐ帰っちゃいますか…?」

若干びくびくしていた私に川口先生は、笑顔で答えてくれた。

「あ、藤木さん…? だよな? 放課後はバドミントン部に顔出すつもりだから、まだ学校にいるよ。」

私の苗字は藤木であるが、一目で名前を呼ばれたことに驚いてしまった。

「え…? 名前…。もしかして、みんなの名前覚えてるんですか?」

「うん。1週間前に外崎先生から、顔写真付きの名簿もらって、それでみんなの顔と名前覚えてんだ。まあ…あってるかは自信ないけどね。」

「そうなんですか。私は人の顔すぐ忘れるので、十分すごいと思いますよ? 話しかけられて、誰? っていうときが結構あるので…。」

「あはは、それはあんまりじゃない?」

「…そうなんですけどね。興味がないものは、どうしても…。って、

あ…。」

テンポよく会話をしている間に、いつの間にかみんな帰っていたようだった。川口先生は、思っているより気さくで話しやすいので会話に集中してしまっていた。

「これからすぐに書くので、先生はバドの方に行ってください。そっちに持っていくので。」

「ああ。いいよ、大丈夫。趣味みたいなもんだから、すぐに行かなくても。ここで待ってるからさ、ゆっくり書いてよ。」

ええ?! そう言われても目の前にいられちゃ緊張するって!! 集中して書けないよ…黙っていられない、私の性格じゃ…。でも、そうは言えないし…。

「…わかりました。急いで書くので!」

「急がなくていいよ。それとも俺ここにいちや書きにくい…?」

先生は苦笑いしながら困ったように言った。そんな顔に、どっか行ってくれ!…とは言ったこともできず…。

「いえいえ！！全然大丈…^{びゅ}夫です！！」

慌てて言ったため、嚙んでしまった、恥ずかしい…。これはかなり恥ずかしい…。

「びゅ？！ふはっ！そんな急いで言わなくても…面白いなあ。とりあえず、ここにいてもいいということ、ありがとうね。」

「…はい。」

そういえば、バド部に行くって、先生バド部だったのかな？朝そんなこと言ってた？…私、本当話聞いてなかったんだな…でも、話やすくてよかった。日誌も話しながら書いていけばいいか。

先生の新たな一面に安心して、私は思わず笑顔になっていた。

第5話

「そういえば、藤木さんはなにかの部活に入ってるの？」

「あ、はい。華道部に入ってるんですけど、週1しかないので毎日暇なんですよ。」

「そうなんだ。なんか華道部って合ってるね。」

「見た目だけらしいですよ、合ってるのは。話し出すと、全然違っ
ねってよく言われますし…。おしゃべりすぎるんでしょうね…。あ
と気が強いのも原因かも…。」

「そうなの？まあ見た目だけで判断されるのも嫌か…。ごめんね、
軽々しく言って。」

「いえいえ、気にしないでください。まあ見た目だけでも褒められ
るのは嬉しいですね。そんなに気にしてないですよ。」

「そうなのだ。私は見た目が大人っぽく綺麗だから物静かに見えてし

まづらしく、話すとおしゃべりで気が強い性格にみんな驚いてしまう。別にツンと澄ましてるつもりはないのに。でも、昔から言われすぎてそれにも慣れてしまった。ただ、最近じゃ、クラスの子に「沙良様」と呼ばれているのに戸惑いを隠せない…。なんでも、運転手のじいやがいるお嬢様に見えるらしく、勝手にお嬢様キャラにされてしまったのだ。他の人から見たらどう見えるのだろうか？なんだか、私がみんなに言わせてるように思われる気がする…。ますます気が強いキャラが固定されそうだ…。高飛車とか…。

「藤木さん…？どうした…？」

「あうっ…すみません…ちょっとトリップしてました。」

「トリップ？！トリップってなに？」

「あつっえつと…。妄想です……。すぐに考え事する癖があつて…。」

「そんなに妄想してんの？！楽しそうだな～！藤木さんって天然のにおいがするもんなあ。」

「天然？天然ではないですよ。ちょっと人とずれてるだけで…。」

「そうなの？でも面白くっていいね。一緒にいたら飽きなくて、いつも楽しそうだよ。」

先生は口を大きく開けて笑っていた。先生のその顔がすごく楽しそうで、まるで少年のようだった。私はドキドキしながら先生を見つめていたけど、笑い終わった先生と目が合うとどうしていいかわからなくなった。

「ん？笑ったから怒っちゃったかな…？」

「怒ってないですよ！！楽しそうだな」と見ていただけで…。」

そんな優しい顔で見ないでほしい…。綺麗な透き通った黒い瞳に見つめられると、わけもわからず胸の鼓動が速くなって、先生の顔を見ていられなくなる…。

「あ…あの…！日誌書き終わりました！」

「終わった？そうか…1時間も経ってたんだね。楽しかったからあつという間だったよ。」

「わ、私も楽しかったです。日誌にも先生のこと書いたんで、ちゃんと見てくださいね…？」

「うん、楽しみにしてるよ。今日はありがとう。…生徒と仲良くなれるかが心配だったんだけど、藤木さんと話したことであらゆる安心できた。会話も普通に出来たし、年の差もそんなに気にならないって。明日からは、もっとみんなと仲良くなれたらいいな。」

「仲良くなれますよ！うちのクラスは、みんな明るくて面白い人たちばかりなので、すぐに仲良くなれると思います。年の差だって5歳なら、全然大丈夫ですよ！」

「そう言ってもらえると心強いな。ありがとう。さあ、帰ろうか。」

先生と4階の教室から出て、歩きながら話していたらもう1階だった。

「部活頑張ってくださいね。…今日は先生と話せて楽しかったです。

」

「うん、楽しんでくるよ。それじゃあ、また明日ね。気をつけて。」

「はい、さようなら。」

そのまま先生は体育館の方へ向かって行った。

私は先生の後姿をしばらく見ていたが、はっとして下駄箱の方へ歩きだした。

なんで私先生的こと見てたんだろう。無意識で見てたよね…？
…きつと、先生と思っててもみなかった接触到自分でも驚いてるだけ

なんだ。

でも本当は…。

もっと話したいって思ったんだ。
先生に見つめられたとき。

第6話

昨日は家に帰った後、先生の笑った顔が何回も浮かんできてなんともいえない気持ちになった。ぼくとした時間が結構あって、お母さんにどうしたの？具合悪い？と聞かれてしまったほどだ。…自分の気持ちを素直に言うこともできず、なんでもないところまかしたのだが。

そんなわけで少しもんもんとした気持ちを抱えて今日は学校へ来た。

「あつおはよう沙良。…ん？なんか今日テンション低くない？」

「おはよ。そうでもないよ。考え事してたから、ちよつとぼくっとなしてたのかも…。」

私の長所は、いつも明るいところなんだ。このもやもやをこれ以上考えたって何も変わらないんだから考えるのはよそう。…必要になったら、わかるよね。

「そう？大丈夫？」

「うん！もう大丈夫！！考えるのやめた！」

「えー?!切り替え早いなあー!!...でも、私に言えることだった
ら、相談してよね?」

「ありがと!!自分が考えてることがまとまったらちゃんと言っ
ね。」

紫苑には悩んでいることがあつたらいつも相談して話を聞いてもら
っている。私の気持ちを否定せず、最後まで話を聞いたうえで自分
の意見を言ってくれるから、すごくためになるし安心するんだ。

ホームルーム近くになって、教室にみんな集まってきた。「おはよ
うございまーす!!川口先生!!」という声が聞こえて、ついドア
の方を向いたら川口先生が教室に入ってくるところだった。

先生は笑顔であいさつしている。心なしか昨日よりリラックスして
るようだ。私も昨日はたくさん話したんだし、あいさつしようかな
と思っていると先生と目が合った。そのまま先生はこっちに向かっ
てきて、私に話かけた。

「おはよう、藤木さん。」

「っ...!お、おはようございます!」

「ん…なんか緊張してる？俺は、今日は昨日よりほっとしてるよ。藤木さんのおかげかな？」

「び、びつくりしただけです！緊張してるわけでは…。今日はみんなと仲良くなれるといいですね。」

「うん、今日は体育の時間にも顔出そうと思ってるんだ。体育の教育実習生に誘われたから。一緒に出来たらいいなと思って。」

「そうなんですか？」って、いつの間に先生と沙良仲良くなってるの？！」「

私と先生が話しているのに紫苑は驚いたようだ。確かに昨日の今日で仲良くなっていたら不思議に思つかもしれない。

「あゝ。昨日ね、日誌書けなかったじゃない？先生が日誌書き終わるの待っててくれて、その間にたくさん話したんだ。そうですね、先生。」

「うん。昨日は藤木さんが面白くて、たくさん話したんだ。佐藤さんもこれからよろしくね。」

「そうなんですかー！昨日は先生に興味なかった沙良が、今日は普通に話してたからびっくりしましたよー！私は先生に興味あるので、よろしく願いしますねー！」

「興味ないって、さすがに寂しいな。昨日、藤木さんと仲良くなれたと思ったのは俺の勘違いなのかな？」

そう言って先生は、少し意地悪そうな顔をして私を見た。

「今は違いますよー！！興味ありまくりです！昨日楽しかったし…ってもう、あゝあー！！」

紫苑の発言に私は焦っていた。本当のことを言わなくてもいいのに！と。先生も今は私の気持ちが変わってわかってこんなこと言うし…。

「あははー！そんなに焦らなくてもっ…！！ふはっ。藤木さん一生懸命に言っただもんな〜！！おもしろすぎるよ。」

「ふふ、沙良ってば発狂してるじゃない。まあ、先生にわかってもらえてよかったね？」

よくない。よくないよ…。私のこと二人とも面白がって。でも…

「もうバカにしてー！ー！！」

そう言って私も結局笑ってしまった。やっぱり楽しいのは好きだ。
みんなが笑ってくれるのも。

昨日はいろいろ考えたけど、楽しいことや嬉しいことは素直に受け止めていけばいいんだ。わからないことは少しずつわかっていくはずだから。

今は、先生ともっと仲良くなりたいって思っている自分を受け止めてあげよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2698y/>

その日まで

2011年11月20日21時41分発行